

## ニーチェの倫理思想（八）

水野 清志\*

ニーチェによってとらえられた人間のあり方は多様であるが、それを位階とのかかわりにおいていくつかの類型に区分しつつ、前回から取り上げはじめた。前回は『ツァラトゥストラ』第二部「タラントゥラどもについて」31、32を参照しながら、彼の人間類型が或る位階において存在することを述べ、更に「最後の人間」(Letzter Mensch)にふれた。

そこで、この位階について予め大まかな展望をしておく。位階は、最も低い最後の人間から最高の「超人」(Übermensch)への秩序のうちに構成される。最も低次の人間は、すでに最り上げたように最後の人間として示される。最後の人間は最もネガティブな意味での或る極限的な存在者であるが、そのあり方はまた「小さい人々」(Kleine Leute)、「賤民」(Pöbel)、「善人たち」(Gute)、「善にして義なる者たち」(Gute und Gerechte)などを通して、いっそうはっきりさせられる。次は「民衆」(Volk)である。民衆は現実のあり方に関する限りでは最後の人間と何ら異なるところがないにもかかわらず、なお自らの内に「カオス」を宿していることによつて、もはや何らの可能性をもその内に有しない最後の人間から區別

される。

第三は「高等な人間」(Hoherer Mensch)である。高等な人間はツァラトゥストラの「領域内」にいる「友人」である。高等な人間には、ツァラトゥストラに共通する或る「大いさ」がある。しかしながら高等な人間は、ツァラトゥストラの完全な理解者ないし最終的な「道連れ」ではない。なおその内にネガティブな面を宿しているからである。ツァラトゥストラの超人への最後の跳躍は、この高等な人間の超克において果たされる。

1

「最後の人間」のさまざまなあり方のうち、前回の「小さい人々」につづき、順序にしたがって「賤民」をとりあげることにする。「しかし現にあるのは賤民の国だ、——わたしはもはやだまされはしない。ところで賤民とは、つまりこつた混ぜのことだ。／賤民というごた混ぜ、そのなかには、一切合切が、聖者とならず者、貴公子とユダヤ人、ノアの方舟から出て来たあらゆる畜類が、入り乱れているのだ。／よい風習、われわれのもとでは、一切がまやかし

\* 信州大学医療技術短期大学部一般教育

で、腐っている。もはや誰も尊敬するすべを知らない。まさしくそういう者どもから、わたしたちは逃亡しつつあるのだ。彼らは甘んじて押し付けがましいイヌどもだ。彼らはシュロの葉に金めつきを施す。／わたしたちは賤民から逃げ出したのだ。すべてこれら、わめき立てるやから、文筆に携わるアオバエどもから、また小商人の悪臭、功名心のあがき、いとわしい氣息から——』

「賤民」という言葉は或る種の誤解をひきおこしかねないものであるから、まず賤民概念の本来示すべき範囲についてひとこと述べておくことにする。単なる言葉が示す意味とは別に、本質的にみるならば、ニーチェはこれを決して現実的な人間の身分に関して用いているのではない。そうではなく、ここで用いられている賤民という概念は、精神の次元におけるものと解されなくてはならない。ニーチェはまた別の個所で次のように述べている。「かつて精神は神であった。次いで精神は人間になった。そして今は、それどころか、精神は賤民さへなる。」<sup>(1)</sup>こうして、まず、取り上げて批判される賤民とは、精神の次元における事柄であることがわかる。

ところで精神のこの「神」—「人間」—「賤民」という変化の順序からみれば、賤民とはまた精神の最も新しい段階における事柄である。つまり賤民とは現代における精神状況を示すものであり、しかもそれらのネガティブな面にかかわるものである。しかし現代の精神状況は、このネガティブなあり方のうちにその特質をもっているのであるから、賤民性はまた現代における最も本質的な事柄には

かならない。このことを示すのが、先の引用文の「現にあるのは賤民の国だ」という個所である。こうしてニーチェ人間論の一部をなす賤民の考察にあたっては、人間精神の次元においてではあるが、これのもつ現代批判としての意義をつねに念頭におくべきであろう。

ではこの賤民とは何であろうか。先の引用文では次のようである。「賤民とはごった混ぜのことだ。」(Pöbel, das heißt: Mischmasch) ごった混ぜとは或る無秩序なあり方のことである。本来或る秩序においてあったものが、その存在の秩序を失い、雑然とした状態に陥っていることである。

存在者ないし世界の本质は、これまでもしばしば述べてきたように、「権力への意志」(Wille zur Macht)であるから、すべてがそれとのかかわりにおいてとらえられねばならない。つまりいっさいは権力への意志を尺度としてのみ価値がはかられねばならず、そしてまたいっさいは権力への意志に基づいた価値序列のうちにあらねばならない。権力への意志は、それが単に価値評価の基準であるというにとどまらず、それが絶え間ない「自己超克」(Selbstüberwindung)としてあらわれることからわかるように、それ自体構造的に或る序列を形成せざるをえないものである。こうしてニーチェにおいては、価値の認識と価値序列の承認とは、権力への意志にかかわって同一の行為となる。

人間の本质もまた権力への意志であるから、ニーチェの人間観の理解にあたっては、「実存」<sup>(2)</sup>ととも「位階」(Rangordnung)の観

点が最も基礎的な事柄の一つとなる。位階とは人間存在における価値序列である。今述べたように人間の本质は権力への意志であるから、位階に即して理解するということが、人間を本来的な存在の秩序においてとらえることになる。ところが今やこの位階が無視されている。そのことを先の引用文は、「聖者とならず者」等々の比喩的な例を三つあげて「一切適切が入り乱れている」と述べる。

本来の秩序を無視する賤民のあり方を、ニーチェはまた右の部分につづいて「もはや誰も尊敬するすべを知らない」と言いかえる。尊敬とは価値と価値序列に対する尊敬である。尊敬するすべを知らない者は正常な価値観を喪失している。尊敬するすべを知らない賤民のこのあり方を、ニーチェは別の個所で次のように述べる。「賤民は、何が大きく、何が小さいか、何が真つすぐで正直であるかを、知らない。」真に価値あるものを価値あるものと認めないとすれば、一見尊敬のごとき行為もまた尊敬ではありえず、いわば単なる追従である。このような単なる追従者を、ニーチェは「甘ったるく押しつけがましいイヌ」と表現し、その行為を、最も美しい「シユロの葉」にうわべを飾らんとして「金めつき」をほどこすことにとどえている。

## 2

真の価値を見失い、位階を失った賤民のその雑種的本性を現代人のあり方へといっそう強く結びつけ、より具体的に示しているのが

先の引用における「文筆に携わるアオバエ」(Schreib-Schmeißfliege)、「小商人」(Kraemer)という表現である。

まず「文筆に携わるアオバエ」と同様の表現は、「文筆に携わるキツネ」(Feder-Fuchs)、「文筆の賤民」(Schreib-Gesinde)などにみられるが、これらはみな現代社会を或る意味で象徴する、最も現代的な人間、すなわちジャーナリストをさした言い方である。しかもこのネガティブな言い方の中に、ニーチェの厳しい批判が示されている。

ニーチェのジャーナリスト批判の核心は、例えば次の文に表わされている。「すべての書かれたものの中で、わたしは、人が血でもって書いているものだけを、愛する。血でもって書け。そうすれば、きみは、血が精神であることを経験するであろう。／他人の血を理解するということは、たやすくできることではない。わたしは怠け者の読書家たちを憎むのだ。／読者という者を見抜いている者は、もはや読者のために何もしないであろう。なお一世紀のあいだ、読者なるものが存在し続けるとすれば——精神そのものが悪臭を放つにいたるであろう。／誰もが読むことを学んでよいということになれば、長いあいだには、書くことだけではなくて、考えることまでも腐敗させられる。」

右の文を全体とのかかわりの中でみるに先立って、まず部分的に一二の概念について注釈をしておかねばならないであろう。その第一は「血」(Blut)である。ニーチェは、自分の思想の表明にあた

つてしばしば生理学的用語を使うが、この場合もそうである。彼が生理学的用語を使うのは、彼がその思想の根源に「身体」(Leib)をおいているからである。単なる唯物論的概念から區別されて使用される身体の意味については、これまでもしばしば述べてきたからここではふれないが、右に血と述べているのも、それは身体の端的な表現である。したがって第二に、右の文における「精神」も血と対応し、すでに述べた身体—精神の関係の中でとらえられねばならない。

さて「書くこと」も「読むこと」も、実は「精神」(Geist)の次元における事柄である。しかし精神にとって重要なのは、「血が精神である」(Blut ist Geist)ことである。つまり精神が血すなわち身体と乖離せず、まさにそれの正直な表現 (redlicher Ausdruck) であるということである。身体とはまた「自己」(Selbst)でもあったから、この場合精神は自己を正直に表現するものでなければならぬ。こうして、書くことも読むことも血と直結していて、すなわち自己の表現ということにおいてのみ、またそれとかわらせてのみ真の意義をもつことになる。

これに反しジャーナリストの場合は、書くことが血(自己)を離れ、ただ精神の次元のみでなされる。この精神と血(自己)との乖離というところに、ニーチェのジャーナリスト批判の核心がある。

いささか前おきが長くなったが、こういった前提のもとに右の文を読むならば、「わたしは人が血でもって書いているものだけを愛

する」という個所は、真に書くという行為が自己に基づくものであることを表わしている。しかし自己とは、各人の内にあり、「窓をとぎした」、絶対の孤独そのものとしての、独自の質的存在であるから、続いて「他人の血を理解する」ということは、たやすくできることではない」と言われる。

自己に基づかない、自己を遊離し、その意味で自己を喪失した、単に精神の次元でのみ書く者およびそのような次元でのみ読む者は、右の文に言う「怠け者」である。「読者なるものが存在し続けるとすれば」と「誰もが読むことを学んでよい」ということになれば」という場合の読者や読むこととは、いま怠け者として述べた読者ないしは読むことである。しかしそのような読者の怠惰はまた、逆に精神ないしは思考の活動に悪い影響をおよぼす。そのことを表明したのが、右の文の「精神そのものが悪臭を放つ」、「考えることまでも腐敗させられる」という個所である。

血とは身体であり、自己であるから、血を忘却した彼らは、まさに自己喪失においてある。自己の喪失はまた価値の喪失である。なぜなら、自己はそれ自体いかなる比較をも超えた、或る絶対的な質として独自のものであり、価値そのものとして、あらゆる人間の価値に先立つ根源 (Ursprung) であるからである。先に、彼らにおいては真に価値あるものが価値あるものとして尊敬されえない、つまり正常な価値観が失われていると述べたが、彼らにおいては自己が失われていたのである。

質的価値を喪失した者は、単に量的、雑種的な存在者となる。つまり自己を失った者は、もはやだれかれの区別のない、だれでもあってだれでもない平均的な一般者、すなわち雑種となる。質を失って空虚となった彼らは量にのみがみつゝ。彼らは質的に語ることに代えて量的な大ききのみ頼つて絶叫し、また自己喪失ゆゑの臆病から量的な無難さを行為の原理とする。ニーチェが「文筆と絶叫で訴え続ける者たち」と言い、また「われわれはわれわれの椅子を中間においた」——彼らのほくそ笑みはわたしにそう言う——『瀕死の剣士たちからも、満足したブタからも、同様に遠く離して。』／だが、これは凡庸 (Mittelmaßigkeit) というものだ、たとえそれが中庸 (Mäßigkeit) と呼ばれているにもせよ」と述べているのも、このことに関してである。

## 3

ところでジャーナリストである彼らのかかわるものは「新聞」(Zeitung) である。ニーチェは新聞について次のように述べる。「ここでは一切の大きいなる感情は腐敗する。ここではからからに干からびた小さい諸感情がからからと音を立てることだけが許されているのだ！／あなたにはすでに、精神のもろもろの屠殺場ないしは下等な料理小屋のにおいがしないか？ この都市は屠殺された精神の湯気でけむっていないか？／だらりとした不潔なぼろぎれのように、かずかずの魂がぶら下っているのが、あなたには見えない

か？——しかもなお、人々はこのうぼろぎれをねたにして新聞を作るのだ！／精神がここでは言葉の戯れと化してしまったのが、あなたには聞こえないか？ 不快な、言葉のすすぎ水を、精神は吐き出すのだ！——しかもなお、人々はこのう言葉のすすぎ水をねたにして新聞を作る。／人々は冷感症にかかっている。そこで、火酒を飲んでわが身を暖めたがる。人々は熱に浮かされている。そこで、凍えた精神の持ち主たちに触れてわが身を冷やしたがる。人々はみな、世論という慢性の病氣にとりつかれているのだ。」

身体すなわち自己の機能である精神は、自己から乖離せず、自己に正直である限りにおいてのみ本来の意義をもつ。自己を離れ、自己を喪失した精神はもはや空虚であり、空転する。右の文の主旨は、新聞がこの空虚な、単なる精神の産物にはかならないということにある。

さて右の文の「大きいなる感情」とは、自己を有し、自己に支えられた感情であり、「小さい諸感情」とは自己を喪失した感情であるが、これは自己を有する精神と自己を喪失せる精神とに対応するであろう。そして「ここでは……だけが許されている」と述べて、自己喪失の状態が、というよりそのような状態だけが現代社会における事柄であることをまず示す。精神からそれ本来の意味を奪った現代社会のあり方は、次の段落において「精神の屠殺場ないしは小料理屋」と表現される。屠殺し、料理するとは、精神を自己からひき離し、自己喪失の状態へと変えていくことである。このように現代社

会によっておとしめられた精神のありようを表わしたのが、「ぶら下っている魂」、「ぼろぎれ」といった言葉である。また「不潔な」という言葉は、自己に不正直な精神のあり方を意味している。

現代社会における精神のあり方を更に言い換えているのが、「言葉の戯れと化してしまった」という個所である。精神が言葉の戯れと化してしまったということの意味は、精神が自己から乖離し空転しているということである。言葉は精神の次元における事柄である。言葉について、それを身体—精神、自己—自我という関係に対応させて示すならば、行為—言葉となる。したがって精神が言葉の戯れとなるということは、精神が単なる精神の次元における事柄となることであり、すなわち精神の空疎化、空転を表わしている。

空疎となった精神は、自己を有しないが故に単なる量的雑種性という性格をもつ。雑種化、水平化の中にあつて最大の力をもつものは「世論」(Öffentliche Meinung)である。いまや書く者も読む者もすべてが世論にとりつかれる。つまり書く者は、空疎となった精神でもって、しかも読者大衆の意志に支配されつつ書き、<sup>(1)</sup>他方読む者は、自分の思考や行動のすべてに関してジャーナリズムのつくつた世論に支配される。その意味で、現代社会における人々は、すべて「世論という慢性の病気にとりつかれている」ことになる。「冷感症」という言葉は、自己にとつてはもろろんのこと、本来の精神にとつてさえもよそよそしい世論に支配されている病的状態を意味している。いまや人々は自己を失っているが故に、自己ならぬ「火酒」

や「凍えた精神の持ち主たち」という他者を必要とし、それに従わざるをえない。そのようにして、自己を失い世論にのみ動かされる者の行為は、右の文では「熱に浮かされ」ないしは「わが身を冷やす」と表現されているが、この表現からはこの行為の異常さ(病の深さ)がまず感じられる。しかしこの行為の本質は、暖めすぎぬよう、また冷えすぎぬようという不徹底さを示す右の文意からも明らかのように、主体性の欠如にある。こうして新聞こそ賤民となった精神のあり方を示す最大の実例である。

## 4

次は小商人である。小商人とは、くり返しニーチェが使用する表現にしたがえば、「ごみの中からどんな小さな利益でも拾い集める」者、ないしは「小銭をじゃらじゃら鳴らす」者である。そこでまず、これらの表現を含む文を手がかりにして、小商人のあり方をみていくことにする。「今なお輝いているものとは、総じて——小商人の黄金しかないところでは、小商人が支配するがよい！もはや王たちの時代ではない。今日、民と自称しているものは、王たちを戴くに値しないのだ。／さあ、これら諸国の民が、今やみずから小商人たちのように振舞うさまを見よ。彼らは、どんなごみのなかから得られる、どんなに小さい利益でも、いとわずに拾い集めるのだ！／彼らは互いに動静をうかがい合い、互いに何かをねらい合う、——それを彼らは『善隣』と呼ぶ。……／わたしの兄弟たち

よ、最善のものが支配すべきであり、じっさいまた、最善のものは支配することを欲するからだ！そして、これとは別の教えが説かれるところ、そこには——最善のものが欠けているのだ。<sup>12)</sup>

賤民の現代における実例が、ジャーナリストと並んでこの小商人であることはすでに述べた。右の引用文の最初の段落も、このこと——現代が小商人支配の時代であること——を示している。しかし豊かさを失った小商人支配の時代は、言うならば真の意味での豊かさと貧しさの区別をまたに喪失してしまっている。「今日なお、《貧しい》(arm)と《富める》(reich)とのあいだに区別があらうか！——この区別をわたしは忘れてしまった、——そこでわたしはのがれ去ったのだ、遠くへ、いよいよ遠くへ。」

「貧しい」と「富める」の区別がないということは、そのこと自体とりもなおさず、貧しさによる富めることの否定にほかならない。たしかに区別がないということは富めることと共に貧しさの否定でもある。しかし否定されて前者は大きなものを失うのに反し、後者は大きなものを得る。したがってこの区別の喪失は、現実的には貧しさの側からの富める側への支配となる。またこの両者の区別の喪失は、富のもつ真の価値を見失うことであり、富という価値の上の位階(例えば豊かさと貧しさという)をも失うことである。ここにも価値ないしは位階の喪失による雑種性というネガティブな特徴が示されている。ところで、ここではまた「王たちの時代」と小商人支配の時代とが対照され、この関係は引用文の最終段落におけ

る「最善のものの支配」と「最善のものを欠く別の教え」とに対応する。いうまでもなくここで重要なのは「別の教え」である。

さて小商人とは何であるかを表わしているのが右の引用文の次の個所である。「彼らは、どんなごみのなかから得られる、どんなに小さい利益でも、いとわずに拾い集めるのだ。」これと同様の表現は、第三部「三つの悪について」(Von den drei Bösen)および第四部「みずから進んで乞食となった者」(Der freiwillige Bettler)においてもみられる。そこで意味上かかわりのあると思われる部分をも含めて、これらの個所をまずあげ、改めて右の表現に基づきながら、小商人とは何かを考えることにする。

まず最初の例は次のようである。「それはおのれから一切の臆病なものを払いのける。それは語る、劣悪とは——これすなわち臆病のことだ！と。それにとつては、つねに心配し、嘆息し哀泣している者、誰にせよいとささいな利益を拾い集める者は、軽蔑すべきものと思われる。<sup>13)</sup>」第二の例は次のようである。「——富の囚われびとなつて、どんなごみのなかからでも自分の利益を拾い集め、その目は冷たく、その思いは情欲に充ちている者たちに対する「吐きけ」、天に向かって悪臭を放つところの、こういう賤民に対する「吐きけ」、————こういう金めっきされた賤民に対する「吐きけではなかったか？」。彼らの父祖たちは、すりか、腐肉を食う鳥のたぐいか、くず拾いであつたし、また、これらの父祖たちの女房どもは、喜んで人の意に従う、みだらな忘れっぽい連中。<sup>14)</sup>」

すでにふれたように、賤民という言葉自体が専ら或る比喩的意味をもっていたが、小商人もまた比喩にすぎず、眞実は精神の次元における現代そのもののあり方を示すものであることはもちろんである。さて現代社会が本来の豊かさを失ったところに成り立っている貧しいものであるとすれば、右の「ごみ」(Kehricht)という言葉にも、現代社会におけるもののある方の特徴が反映されているといつてよいであろう。つまり眞の価値が見失われて、いわば玉石混濁的にすべてが雑種となつた現代におけるこの雑然としたあり方が、まさにごみの状態を呈しているといつてよい。貧しいごみの中から最も大きいなるものは見出すべくもないから「小さい利益」と言われるのであるが、ごみしかないところからはつねに小さい利益しか得られない。小さい利益でも「いとわずに拾い集める」行為は、まさに小さい行為である。これが現代における行為である。

この現代の行為の内容は、右の引用から順にあげるならば、次のようである。それらは、まず「彼らは互いに動静をうかがい合い、互いに何かをねらい合う——それを彼らは『善隣』と呼ぶ。……最善のものは支配することを欲する……それとは別の教え」という個所であり、次に「それは語る、劣悪とは——これすなわち臆病のことだ」と。つねに心配し、嘆息し、哀泣している者」という個所である。第三には「その目は冷たく、その思いは情欲に充ちている者……彼らの父祖たちは、すりか、腐肉を食う鳥のたぐいか、くず拾いかであつたし、またこれらの父祖たちの女房どもは、喜んで人の

意に従う、みだらな、忘れっぽい連中」という個所である。

ここに示された行為の内容に関して大前提をなすものは「別の教え」である。最も善きものとは支配すること、すなわちニーチェのいう貴族主義であるが、それは、これとは別の教えであるからいわゆるデモクラシーである。何度も言うが、貴族主義にせよデモクラシーにせよ、ここではいっさい現実的政治の次元における事柄を意味しない。それは精神の次元における、ニーチェ独自の概念である。デモクラシーは平等を原理とするが、それは眞の価値を無視し、位階を否認するところに成り立つ。デモクラシーはいわば自己喪失態である。小商人成長の場は、こうした自己喪失による雑種の土壌の上にある。すべてが価値を失つて、いわばごみと化した中で彼らは行為する。しかし自己への確信を失い、エゴイズムを大らかに満たすことの不可能となつたいま、むしろ陰湿なエゴイストが跋扈する。表むきエゴイズムを否定しながら、その実エゴイズムを行為すること——自己喪失者には、そうしてしか自分の利益(小さな利益)を満たすことはできないのだが、このような彼らはまた己れの利益のためにデモクラシーを求める。

次に「互いに動静をうかがい合い、互いに何かをねらい合う」と「その目は冷たく、その思いは情欲に充ちている」とは同じ意味である。賤民である小商人の徳は、それをどう美しい言葉で飾ろうと(例えば善隣、同情などと)本質を変へることはできない。しよせん彼らのモラルは金めつきという偽りの衣を着せられているにすぎ

ない。それを取り去るならば、彼らはまさに冷酷であり、つねに「他をうかがい、ねらわん」とする「情欲」にとらわれているものであることが露呈する。彼らはそのために(そのような本性の故に)、こみとなった世間のあらゆることにかかわり、そこから「腐肉をあさる鳥」や「くず拾い」のようにどんなことでもあさる。また自己を喪失し雑種となった彼らは、すべてのことにかかわりながら、しかしそれらに深く徹することなく、つまりどれ一つに対しても徹底して自ら思考することなく、それらを消化不良のまま放置する「みだらな、忘れっぽい連中」である。

第三に小商人の大きさを欠く行為は「臆病」(Feldheit)なるが故に軽蔑すべきものといわれる。彼らは臆病である。これにかかわる引用文に続いて、ニーチェは「総じてこれらの臆病者たち」と述べながら、臆病ということのうちに次のような意味を含ませている。それはまず一切のものに対して「おすおすした不信の念」をいなくことである。自己を信じ、真の価値を確信することのない者にとっては、すべては不信の対象となる。次には「即座に迎合」する卑屈なことであり、更には奴隷のように「有毒なつばでも毒々しいまなざしでも呑みこみ」、極度に忍耐つよく、足を知ることである。しかしここで行われるこういった没我的譲歩は偽りの行為である。

## 5

次は「小銭をじゃらじゃら鳴らす」にかかわる個所である。「人

々は互いにけしかけ合うが、どこへなのか？は知らない。人々は互いに熱中し合うが、なぜなのか？は知らない。」「しかし、あの下のはう——あそこでは、一切が話し、一切が開き漏らされる。ひとが鐘を鳴して自分の知恵を告知しようとも、市場の小商人どもが、小銭を鳴りひびかせて、そういう知恵のひびきを打ち消してしまいうだらう！／彼らのもとでは、一切が話し、誰ももはや理解するすべを知らない。一切は水のなかに落ち、何ひとつとして深き泉のなかに落ちない。／彼らのもとでは、一切が話し、何ひとつとしてもはやうまく行かず、成就しない。一切がががが鳴き立てるが、誰が今なお静かに巢について、卵をかえそうとするだろうか？／彼らのもとでは、一切が話し、一切が話し砕かれる。そして昨日はなお、時代そのものとその歯にとって堅きにすぎたものが、今日は、すり砕かれ、かみ砕かれて、現代人の口からぶら下っている。／彼らのもとでは、一切が話し、一切が明るみに出される。そして、かつては深い魂の持ち主たちの秘密とか秘事とか呼ばれたものが、今日では、街頭のラッパ吹きどもや、その他の軽薄な者どものもものとなっている。」「

「けしかけ合い、熱中させ合う」行為はいかにも主体性を失い、確信を失っているが、これが彼らの行為の特性である。「どこへなのかは知らない。なぜなのかは知らない」とは、彼らにおいてなされるそのような行為の一切が、その目的や根拠に関する自覚を失っていることの表明である。「じゃらじゃら鳴らし、りんりん鳴らす」

という喧噪にまぎれていわば世論ないしジャーナリズムに盲従するという、現代的行為の表明である。

世界のことを何ひとつ見のがすまいと、およそありとあらゆることにかかわって大げさに話さないではいられないのに、理解という段になれば、そのどれに対しても徹底することのない中途半端な言い消化不良が、雑種の現代における「語る」という行為の特徴である。「一切が話し、一切が聞き漏らされる」、「一切は水の中に落ち、何ひとつとしてもはや深い泉のなかに落ちない」等々の言葉は、すべてこのことの表現である。「深い泉のなかに落ちない」とは、話を深く語り、深く理解することの、——つまり徹することへの無能さを意味している。

すでにジャーナリズムのところでも述べたが、質的な語りに代えて量的な語りがなされるのが現代の特徴である。質的な語りとは、話すべきことをそれにふさわしく話すことである。それはまた「深い魂の持ち主たちの秘密とか秘事とか呼ばれたもの」を、それとしてそのまま保持することであり、「その歯にとって堅きにすぎたもの」を安易に砕かないことである。語りにおける真の価値とその位階を無視するところに量的な語りが生じる。ここでは「一切が話し、砕かれる。」一切がすり砕かれ、かみ砕かれて、「ラッパ吹きども」の口によって全ての人間の耳に達する。ひとはもはや自ら選択し、自らかみ砕くという自立的行為を喪失する。

## 6

最後に、賤民の考察にあたって、ツァラトゥストラの次の言葉は見のがしえない。「わたしはかつて次のように問い、自分の問いがのどにつかえて、ほとんど息がつまりそうになったのだ。何だっ  
て？ 生は賤民をも必要とするのか？／わたしの吐きけそのものが、わたしに、翼と、源泉を予感する力とを、もたらしたのか？  
……まことに、わたしは最高の高みへと飛び上らなくてはならなかったのだ！」<sup>(18)</sup>

引用文の前半は、生もまた最もネガティブな賤民を必要とするものであることの衝撃的な表明である。西欧の歴史においては、悪の存在は、その解決のために例えばテオディセーが主張されるなど、最も困難な問題であった。賤民をただちに悪と同一視することはできないが、ニーチェにおいてもまた、賤民というネガティブなものの克服は、「息がつまりそうになる」ほど、或る意味で困難さを伴う問題であった。

しかし右の引用文の後半は、この問題に対する解答を基本的には示している。まず「吐きけ」(Ekel)とは、ニーチェの身体論に基づく独特の用語であるが、これは或るネガティブな気分を表わす。ここではもちろん賤民に対する気分としての吐きけである。また「翼」とは自己超克の翼であり、「源泉」とは或る最も根本的な思想、すなわち「永遠回帰」(ewige Wiederkunft) 思想である。「吐きけそのものが翼と源泉を予感する力とをもちたらしめた」という

ところからすれば、吐き気すなわち賤民もまた自己超克のための重要なきっかけとなる。

それは自己超克そのものの構造から明らかである。つまり自己超克は、つねに超えられる自己と超える自己という、自己における両極端の緊張関係のうちで行われる。自己を広く人間存在一般におきかえるならば、人間存在における自己超克が可能となるためには、超えられるべき人間存在すなわち賤民が必要となる。したがって賤民もまた生が生として存立し続けるための必然的な要素である。しかし生の中に必然のものとして組みこまれたこの賤民に対する吐きけは、生における一切のものの永遠復帰という方方によって無限に還帰する。ニーチェの永遠復帰思想は、このネガティブなもの(すなわちニヒリズム)を主体的に克服したところに成り立つものであるが、右の文の吐きけは、この永遠に回帰する吐きけをも含意し、更にその克服としての永遠復帰思想を「予感」をせるものである。

註

- (1) *F. Nietzsche* : Also sprach Zarathustra, Viertes und letzter Teil, Gespräch mit den Königen, 1. 各本書からの引用の訳文は、吉沢伝三郎訳『ツマラトスマトラ』(理想社)を引用して記した。
- (2) *F. Nietzsche* : *ibid*, Erster Teil, Vom Lesen und Schreiben.
- (3) *F. Nietzsche* : *ibid*, Viertes und letzter Teil, Vom höheren Menschen, 8.
- (4) *F. Nietzsche* : *ibid*, Dritter Teil, Vom Geist der Schwere, 1.
- (5) *F. Nietzsche* : *ibid*, Zweiter Teil, Vom Gesindel.

- (6) *F. Nietzsche* : *ibid*, Erster Teil, Vom Lesen und Schreiben.
- (7) *F. Nietzsche* : *ibid*, Dritter Teil, Vom Vorübergehen.
- (8) *F. Nietzsche* : *ibid*, Von der verkleinernden Tugend, 2.
- (9) *F. Nietzsche* : *ibid*, Vom Vorübergehen.

(10) ニーチェは『ツマラトスマトラ』第一部「身体を軽蔑する者たちに ついて」において次のように述べている。「感覚と精神とは道具ないしは玩具である。それらの背後には、さらに自己が横たわっているのだ。……きみのもう一つの思想や感情の背後に、わたしの兄弟よ、一人の強大な命令者、一人の知られざる賢者が立っている——この者が自己と呼ばれる。」(傍点筆者)

vgl. *F. Nietzsche* : *ibid*, Erster Teil, Von den Verächtern des Leibes.

(11) すなわち引用してされたところであるが、「誰もが読むことを学んでよいというのに、なれば、長いあいだには、書くことだけではなくて、考えることまでも腐敗をせられる」という個所から、読む者の意向ないし意志が、書く者に対し、その書き方のみならず考え方まで規定しないではないならぬものであることを知る。

vgl. *F. Nietzsche* : *ibid*, Vom Lesen und Schreiben.

- (12) *F. Nietzsche* : *ibid*, Dritter Teil, Von alten und neuen Tafein, 21.
- (13) *F. Nietzsche* : *ibid*, Von den drei Bösen, 2.
- (14) *F. Nietzsche* : *ibid*, Viertes und letzter Teil, Der freiwillige Bethler.
- (15) *F. Nietzsche* : *ibid*, Dritter Teil, Von den drei Bösen, 2.
- (16) *F. Nietzsche* : *ibid*, Vom Vorübergehen.
- (17) *F. Nietzsche* : *ibid*, Die Heimkehr.
- (18) *F. Nietzsche* : *ibid*, Zweiter Teil, Vom Gesindel.